

編集後記

編集委員長の任期最後の年の『ヴィクトリア朝文化研究』を無事に刊行することができて、ひとつ肩の荷を降ろした思いである。

前年から継続して設けたエッセイ欄には、「伝記」をテーマに3人の先生方にご寄稿いただいた。とりわけご無理を申し上げて文章を執筆いただいた草光俊雄先生には心より感謝したい。加えて、もう一つのエッセイ特集として、現在のヴィクトリア朝研究の多様な側面を伝える文章を学会内外の多彩な専門の研究者の方々にご執筆いただいた。入稿の1ヶ月と少しほど前に加藤千晶氏から『レイディ・リリス』のオークションの情報をご教示いただき、同時に急遽ご寄稿をお願いすることになった一幕も思い出深い。最初の読者として合わせて9篇のエッセイを通読して、「ヴィクトリア朝文化研究」の幅広さ、奥深さをあらためて痛感することになった。

今号の編集において嬉しかったことの一つとして、一般投稿論文4篇のうち2篇を掲載できたことがある。前号の同欄にも書いたように、編集委員会ではいっさい外的な配慮がないところで論文を審査しており、その厳正な査読を通過した2篇の論文の著者は、ヴィクトリア朝文化研究の次代を担うことになるというてよいだろう。また書評においても、私が個人的に畏敬するベテラン研究者の面々に加えて、優秀な若手研究者たちの原稿を並べることができた喜びも小さくはない。論文に話を戻せば、本誌では懲憑論文も査読の対象としているが、本号で該当する坂本優一郎氏、横山千晶氏による、学問の新領域を切り開くような論文を掲載できたことで本誌の学術的伝統を維持し更新できたような思いを抱いていることも記しておきたい。

編集を終えて感じるのは、月並みながら、「編集委員長」はやはり「透明な媒体」のようなものなのだということである。なるべく無心にアイデアを吸収して、「この人しかいない」という優秀な研究者にして執筆者に原稿を依頼する。論文査読にしても、ほとんど客観的に存在する自分の中の研究の水準に、眼前の文章が開示する研究の一つの形態を当てはめて判断する行為があるだけだ。しかしそのようなあり方が可能だったのは、未熟な編集委員長を、的確な査読作業などを通して支えていただいた編集委員の先生方に恵まれていたからであることは疑いない。編集委員の皆様にはあらためて感謝の言葉を捧げたい。

最後に厚く御礼を申し上げたいのは、川端康雄会長と山口恵里子副会長に対してである。ご多忙をさわめる両先生をこの二年間ほとんど編集委員扱いしてしまったことにお詫び申し上げるが、両先生はつねに快く編集に関してのアイデアを授けてくださった。結果的にそれだけ本誌の内容が豊かになったことは間違いない。この豊かさは、人文系の学会誌の中でも卓越しているのではないかというひそかな自負がある。そして編集委員長の職を楽しんでしまいそう

な危険な感覚を断ち切るように任期を終えられるのは、この上ない幸せというしかない。この編集の経験を大きな財産として、今後は一寄稿者あるいは一発表者として学会に関わっていきたいと思う。

(編集委員長 田中裕介)